

20年間「デパス」を飲み続ける彼女の切実な事情

服用患者は確かな効果を得ても続かず不安に

メディカルジャーナリズム勉強会

2019年12月03日



沙智さんの服用薬、デパスのジェネリック医薬品エチゾラム。一度に大量服用しないように一包化されている

医療機関やドラッグストアで普通に手に入る、完全に合法的な医薬品。それによって、薬物依存に陥り、生活に大きな問題を抱えてしまう。その代表例が「デパス」（成分名は「エチゾラム」）と呼ばれる睡眠薬・抗不安薬だ。

メディア関係者と医療者の有志で構成するメディカルジャーナリズム勉強会がスローニュース社の支援のもとに立ち上げた「調査報道チーム」が、全5回にわたる連載で追っている「合法薬物依存」。第2回は、デパス（エチゾラム）依存患者の実態を明らかにする。

[第1回：合法的な薬物依存「デパス」の何とも複雑な事情（2019年11月29日配信）](#)

※本来複数の製薬企業から同一成分の薬が発売されている際の表記では、成分名のエチゾラムを使うのが一般的である。しかし、服用患者も含め世間一般では簡単に覚えやすい「デパス」でその名が広く知られていることが多い。このため以後はエチゾラムではなく「デパス（エチゾラム）」と表記することをあらかじめお断りしておく。

依存患者に接触

デパス（エチゾラム）を服用し、依存にまで至った患者はどのようなになるのか？

調査報道チームは今回、さまざまなルートを使って服用患者に接しようとしたものの、当初はなかなかうまくいかなかった。[連載第1回「合法的な薬物依存「デパス」の何とも複雑な事情」（2019年11月29日配信）](#)で国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長の松本俊彦氏が指摘していたように常用量依存は実態が見えず、服用患者には必ずしも「依存」との自覚があるわけではない。

また、精神疾患領域に精通した記者の1人は「精神トラブルを抱えている人たちは、とりわけ季節の変わり目に心身の変調を起こしやすく接触しにくい」と語っていたが、取材が本格化したのはまさに秋口。

この記者の予言どおり、デパス（エチゾラム）依存の傾向があると思われる服用者に何とか接触し、取材を了承してもらうものの、直前になって本人が体調不良を訴えてキャンセル。その後の連絡に反応なしということが3回立て続けに発生した。



この連載の一覧は[こちら](#)

そうしたなか、ようやく取材に応じてくれるという東京都内に住む古宮沙智さん（仮名＝50代後半）に会うことができた。路地奥にある沙智さん宅は、室内灯をつけていないこともあり、昼前だというのに薄暗い。沙智さんはその一室に敷いた布団に寝そべり、傍らには夫の嶺二さん（仮名＝50代後半）がマスクを着用して同席していた。

「20年ほど前からデパス（エチゾラム）を飲み続けていますよ」

沙智さんは、横になったまま、か細い声でこう応えた。沙智さんはデパス（エチゾラム）を中心に、複数の精神疾患薬を飲み続けている。

以前は千葉県内に両親と住んでいた沙智さん。「子どもの頃から内気な性格で、うつっぽかった」と語る彼女は、物心ついた頃には物に当たったり、大声を出したりとややパニックを起こすこともあった。

成人後は、父が母に対し暴力を振るう「面前DV」も経験。同居する母が脳梗塞で倒れた30代半ばの頃、そのショックがきっかけになり電話帳で探した精神科クリニックを受診し、デパス（エチゾラム）の処方が始まった。

「デパス（エチゾラム）を服用し始めてからもしばらくは寝返りを打てなかったり、自力でトイレにも行けなかったりしたんです。ひどいときには、食事も手づかみでとても人間らしい生活はできていませんでした。だからこそ症状を改善したかったので、お医者さんに言われたとおりに服用していました」

自力でクリニックに行けないときは実兄が薬だけを取りに行っていた。デパス（エチゾラム）の服用は1mg錠を毎食後1回、1日合計3錠。当初はほかの精神疾患薬も併せて服用していたが、自分で薬のことを調べ、デパス（エチゾラム）以外の薬は副作用で記されていた食欲増進や血圧低下が気になり、自己判断で服用を中止してしまった。

デパス（エチゾラム）だけをやめなかったのは、一定の効果があることに加え、このとき、沙智さんが調べた範囲では自身が気になる副作用が表記されていなかったからだという。

「服用すると、力が湧いてくるんです。服用しなければ食事ができませんでした。ただ、服用しすぎると、いつもの時間におつかいのための外出できなくなります。それが（効き目の）パロメーターでした」

デパス（エチゾラム）には効果として筋弛緩作用がある。しかし、沙智さんの場合はその作用の真逆で、服用すると「力が湧く」が、度が過ぎると筋弛緩作用が強すぎて外出もままならなくなったようだ。

「依存する薬」との説明はなし

一方でデパス（エチゾラム）の依存性について医師や薬剤師から説明はあったのだろうか。

「最初の病院では、『依存する薬』とは聞いていません。もともと処方される量も少なかったからでしょうかね。服用しなかったときのものをストックしていて、不安が治まらないときは多めに服用することもありました」

沙智さんは約10年前、夫の嶺二さんと結婚し、現在の自宅に引っ越した。このときに通院先を近くのクリニックに変えた。デパス（エチゾラム）1mg錠は毎食後と就寝前の合計1日4錠分になった。就寝前の分は沙智さんが希望したもので、医師からは希望どおり処方された。ここでも依存性についての指摘はなかった。

ところが徐々に効き目が薄れてきたと感じるようになった。訳もなく漠然と死を望む「希死念慮」が生じ始めた。

「お腹に力が入らなくなったんです。そして、自分を減ほしたくなる。服用しないと、減ほしちゃう感じです」

デパス（エチゾラム）は薬学的にはベンゾジアゼピン受容体作動薬と称されるグループに属する。実はベンゾジアゼピン受容体作動薬は、長期間服用すると人によっては、薬の効き目が低下する「耐性」が生じることも知られている。その結果、1回に10錠を服用するという状況にすら陥った。いわば完全な乱用である。夫の嶺二さんは当時を振り返る。

「布団の中や下にシートから切り離れたデパスの包装が散らばっている状態でした。本人は全部を服用していないというのが……」

結局、沙智さんはデパス（エチゾラム）の乱用と診断され、精神病院の閉鎖病棟に約3カ月間入院し、デパス（エチゾラム）の離脱が行われた。この離脱は完全に服用を止めるのではなく、用法・用量に定められた1日3錠以内に抑えるのが目的だ。この結果、現在も1mg錠の1日2回合計2錠の服用を続けている。

そして現在はデパス（エチゾラム）も含め、服用している薬は保険調剤薬局で一包化してもらっている。通常、保険調剤薬局で薬を受け取る際は同じ薬が10錠単位などのシート状になったものをもらう人が多いはずだ。

これに対し一包化とは複数の薬を服用する人向けに、錠剤をシートから出して朝昼晩など飲むタイミングに分けて1つの薬包に包装し直す。一般には服用する薬の多い高齢者などで飲み忘れを防ぐために行う対応だが、沙智さんの場合はやや意味が違う。夫の

嶺二さんが説明する。

「要はデパスをシートでもらうと1度にたくさん服用してしまう危険があるためです」

その嶺二さんも2018年8月からデパス（エチゾラム）を処方されている。勤務先でトラブルを抱えたことからうつ病になったのがきっかけだ。嶺二さんの場合は0.5mg錠を1日2回服用している。

「妻を見ているので、危険なことはわかっています。注意しながら服用しています」

デパス（エチゾラム）の服用量を減らした沙智さんはかつてのように薬の耐性を感じることはなくなったというが、それでも涙ながらに不満を訴える。

「服用するな」は「死ね」と同じ意味

「今の医師からは『なるべく服用しちゃダメ』と言われますが、急にそう言われても困ります。いきなり減らしたので、服用しないと力が出ないし、死にたいと思ってしまうんです。起きているときはつねにそうです。だから薬を服用して、ボーっとさせるんです。

与えられた薬でコントロールするしかないのですが、デパス（エチゾラム）の服用量を減らした今も普通に生活ができないのがいちばん困ります。実際に苦しんでいる私には、『服用するな』は『死ね』と同じ意味です。患者にとってはありがた迷惑です。だから医師が信用できません。だって、（苦しみを）わかってくれませんから」

デパス（エチゾラム）を10年にわたって服用していたという四国在住の北方直樹さん（40代後半）にも話を聞いた。北方さんがデパス（エチゾラム）を服用し始めたのは大学生の頃だ。

「たまたま交通事故をきっかけに精神に問題を抱え、抗不安薬の処方を開始したのですが、主治医の処方は何回も変わりました。効果が実感できなかったためですが、そうした中で最終的にデパス（エチゾラム）を処方され、自分に合っていると感じました」

処方は1回当たり0.5mg錠、1日3回を基本に、頓服の分も処方されていたという。ちなみに頓服とは1日3回毎食後のような定期的な服用ではなく、あくまで症状があるときなどに一時的に薬を服用することを指す。

北方さんの服用当時は、デパス（エチゾラム）が麻薬及び向精神薬取締法の対象として指定を受ける前だったが、すでに向精神薬指定を受けていたほかの薬も併用していたため30日おきに医療機関を受診した。デパス服用中に接した主治医は2人。いずれの医師からもデパス（エチゾラム）の依存性について聞かされたことはなかったという。

1日3回が基本だったが、時に不安が強くなるなどしたときは頓服分のデパス（エチゾラム）に手を伸ばした。

「正直言って不安が強くて1日に10錠を服用したこともありました。完全なオーバードーズですね。外出時もお守りのように頓服分を持ち歩いていました。持っていないことが不安になるのです。ただ、次の受診日までには足りなくなるということはなかったですね」

その意味では北方さんはいわゆる常用量依存に当たるかもしれない。そして服用から約10年を経て医師の勧めもあって最終的にデパス（エチゾラム）の服用をやめた。このときはまず1回0.5mg錠を朝晩の1日2回に減量した。ただ、念のための頓服分も処方してもらった。

「1日2回の頃は時々頓服分を服用したり、不安が強くなったため夜の服用分を夕方に前倒しで飲んだりしたことなどはありました。それでも約2カ月でさらに1日1回になりました。その際も頓服分は処方されていましたが、1日1回になってから手を付けることはなくなりました。

1日1回も数カ月で終わり、完全にやめられました。ほかの向精神薬を服用していたことや療養に専念するために仕事を辞めるなどの環境的な要因も好影響だったのかもしれませんが」

その後はデパス（エチゾラム）を服用したいという欲求が出ることもなく、今に至っている。ただ当時のことを振り返って次のように語った。

「今振り返れば、自分はデパスの常用量依存になっていたのかも思うことがあります」

合法的な医薬品が依存症となる

服用経験者の証言に共通するのは、何らかの精神的な悩みを抱えて医療機関を受診したこと、そしてデパス（エチゾラム）を処方され、それまでになかった確かな「効果」を実感したということだ。しかし服用を続けている間にその実感が薄れていき、薬がないと不安に感じたり、決められた用量を超えて服用したりするようになる。「依存症」が形成される、典型的な流れともいえる。

ちなみに「デパス」という商品名はラテン語で「離れる」を意味する「De」（デ）、「通り過ぎる」を意味する「Pas（パス）」を合わせて「病的状態から離れ通り過ぎる」という意味を込めた商品名。にもかかわらず、少なからぬ服用者が薬から離れられない「依存症」に陥るといふ皮肉な結果を生んでいる。

そして同時に、「依存性について説明されることはなかった」という証言も共通する。デパス（エチゾラム）の添付文書（薬の効果や注意点などをまとめた文書）に「重要な基本的注意」として依存性が記載されたのは2017年のことだが、それ以前も医療関係者の間では依存性は周知の事実だった。それにもかかわらず、少なくとも「患者本人の記憶に残る形」での説明はなされていなかったことになる。

覚せい剤やアルコールに依存性があることは、広く知られたいわば「常識」ともいえる。しかし医療機関で処方される合法的な医薬品で依存症になってしまうことは、一般的な「常識」とまではいえないだろう。

だからこそ、十分な配慮をもって患者側に伝達されるべき依存のリスクが、なぜ「伝わっていなかった」のか。医療従事者はどのような意識で、薬の処方や説明を行っていたのだろうか。

（取材・執筆：村上和巳／ジャーナリスト、渋谷哲也／フリーライター）

Support by SlowNews

（第3回に続く）

東洋経済オンライン



関連サービス

- The ORIENTAL ECONOMIST
- 東洋経済education × ICT
- 会社四季報オンライン
- シキホー！Mine
- 東洋経済STORE
- 東洋経済デジタルコンテンツライブラリー
- 株式ウイークリー

法人向け関連サイト

- 法人向けデータサービス
- 東洋経済広告
- 東洋経済プロモーション
- 東洋経済セミナー
- 東洋経済カスタム出版
- 教科書の森

東洋経済新報社について

運営会社 | 採用情報 | 公式アカウント一覧

東洋経済オンラインについて

サービス紹介 | 広告掲載 | WEBサービスでの情報収集 | プライバシーポリシー | 知的財産 | 特定商取引法に基づく表示 | 東洋経済ID利用規約 | 利用規約 | お問い合わせ

東洋経済新報社

Copyright©Toyo Keizai Inc.All Rights Reserved.